

教会の聖人たちにみられる食行動

奥 田 和 子

は じ め に

前報では、聖書における食の意味づけを述べた。本報では実際に聖書に忠実に生きた過去の聖人たちが食事をどうとらえ、どのように位置づけたかを、『教会の聖人たち』^{1,2)}などの文献をもとに探った。聖書が示す食の基本原理がどのように実現されているか検証を試みた。

1 時代別にみた聖人の食行動

聖人とは、聖なる生活を通してキリストの証人として認められた人びとをいう³⁾。「これらの人びとは神の特別の恩恵に支えられた道徳的英雄であるために、その生涯の部分は一般人のまねのできないものであるかもしれない」としながらも、「この人たちも人の子である。どうしてあの人たちにできたことがわたしにできないはずがあろうか」と述べている¹⁾。池田のいうとおり、聖人からなんらかの示唆がえられるものと考え 302 人の聖人たちの記録を辿ることにした。

特に食生活に触れられていたのはそのうち 66 聖人で、年代順に整理した(表 1)。

ここでいう聖人たちは 230 年～1859 年、ヨーロッパの全域、エジプト、トルコ、カナダなどで生まれている。食事のようすを述べたもののうち最も多かったのは、断食、粗食・質素、貧者に食べ物を与えること、節食、飢え、食器の貧しさと工夫、食事の給仕を自らしたこと、飲水の乏しさなどで

表1 聖人の食行動とその理由 年代別

	西暦年	出生国・市	食 行 動	理 由	ページ
・パウロ（エジプト）修道者	230	エジプト	43歳まで洞窟のそばに立っている1本のイチジクの木の実だけを食べていた。しかし、その後は不思議にも毎日1羽のカラスがくわえてきてくれる半分のパンを、死ぬまで常食とするようになった。のどが渴けば泉に行って清水をすくって飲んだ。	洞窟を住居とした。	203
アントニオ（エジプト）修道院長	251 or 252	エジプト ヘラクレア	断食	神との一致。 自我を捨てる。	96
・ニコラオ	270	小アジア （現在のトルコ） パラタ	ある年、ミラー地方を飢饉がおそった。たまたま港にきた船に積み荷の麦を無心して貧しい人に分け与えた。	困っている人をみるとすぐ、助けてやり泣く人がいると慰めて励ました。 近所の貧しい靴屋の三人娘の家に嫁入りの支度金を布切れに包んで投げ込んで（身売りの直前の困窮）を助けた。サンタクロスの名で知られる。	532～ 538
・パウラ	347	イタリア ローマ	貧しい食べ物を食べる	貧しい人に食べ物を与えた。	92
フラスシア修道女	380	現在イスタンブール コンスタンチノープル	厳しい断食をする（修道院に入るときの院長の言葉）	熱心に苦行した。	274
・シメオン（柱の）修業者	390	シリア シサン	断食 四旬節になると主キリストにならない毎年40日間断食をした。	謙遜と隣人愛の実行。	340～ 342
テオドシオ修道者	422	カパドキア 現在のトルコ マリスス	パンなど1度も食べなかった。草や野菜を食べていた。		73
・レオナルド	559 死	フランス ノビリアクーム	食べ物は山の中の雑草や果実であった（リモージュでの隠遁生活）	周囲の人々に愛徳の花を撒いた。	439～ 440
・エリジオ司教	590	フランス サトラック	貧者を集めてかれらのために食卓の給仕をした。	互いに愛し貧者を憐れむ。	517～ 518
・エジディオ修道院長	640	ギリシャ アテネ	飲食物はおもに水と草の根と木の皮とであった。そのほか毎日1頭の鹿が現れて乳を与えてくれた。	孤独が好きで泉の近くの洞窟に住みついたため。	201
スイトベルト司教	713 死	ドイツ ノサンリア	熱心に断食した。	頑固な国民に回心の恵みを求めるため。	244

アンスガリオ	801 ～865	ビカルディ	毎日自分が食事をする前に必ず3, 4名の不幸な人に食べ物を与えていた。	貧者を哀れむ。	178
マインラード司祭	805	スイス スルゲン村	7年間断食しながら祈りの日々を送った。	修業のため。	362
マルチルダ皇后	890頃 ～968	ドイツ	断食に励んだ。 貧しい食事で満足した。	祈りと苦行の生活をした。	277～ 278
・ウダルリコ司教	993	ドイツ アウグスブルグ	ときどき断食をした。	率先して苦行。 自分の財産を使って戦火（ハンガリア人の攻撃）による被災者を救った。	29
・ブルーノ司祭	1032	ドイツ ケルン	大祝日に2度の食事を共同でとるだけであった。 1年中断食修業を続け、ぬかでつくったパンを食べ、病人でも肉に手をつけず魚も買わない。もの乞いで得た卵とチーズは日曜と木曜日に食し、火曜日と土曜日には豆類と雑草を、水曜日と金曜日は水とパンだけである。降誕祭、復活祭、聖霊降誕祭、ご公現などの8日間とその他いくつかの祝日以外は、1日一度しか食事を取らない。	7人で山野の頂きに祈祷所を設けて隠遁生活をした。	326～ 327
ギョーム	11世紀	フランス	肉を食べないようにした。	肉体の快楽に耽ったので償いのため。	198
・マルガリタ（スコットランド）皇后	1045 ～1093	イギリス	毎日食事の時間になると貧者や孤児を宮殿に招待して衣食を与え、人生に明るい希望を持たせるように努めた。	献身的な人類愛。	461～ 462
フーゴ司教	1052	フランス メッシナ レオン州	自発的に厳しい断食をした。	教会のおきてを守らない多くの信者の罪を償うため。	321～ 322
ロベルト、アルベリコ、ステファノ修道院長	1071	イギリス	食器の数を減らした。	清貧の精神。	135
スタニスラオ司教殉強者	1079	ポーランド カラカウ市	よく節食し、食事の量を減らし、しばしば節食し3日間断食した。	難苦欠乏に慣らしていた。 貧者を助け清い生活をしていった。	348～ 349
ノルベルト司教	1080	ドイツ ゲンネブ	飲食を節制した。	苦行に励む。	523
・ベルナルド修道院長教会博士	1091	フランス ディジョン市	いつも湯に浸した少量の黒パンを食事とした。	常に厳格。	150
・トマス（ベケット）司教殉教者	1118	イギリス ロンドン	この両親は毎年成長して大きくなるトマスの体重を計っては同量のパンを貧しい人に贈った。		598

ヨハネ (マタ) 司祭	1160	フランス フォーコン	しばしば断食した。	救済事業。	180
ルトガルデイス 修道女	1182	ベルギー トングル	7年間に断食を主から3度命じられた。	最初の断食は当時流行していたアルビ派の異説(霊は善神の、物質は悪神の創造した物と考え肉体を悪とみなす考え)を減ぼすために、次は罪人の改心のため、最後は教会に対しての迫害を未然に防ぎ止めるため。	549
・エリザベト (ハンガリー)	1207	ハンガリー	飢えた人には食べ物を与えて世話をした。	貧しい人のなかでキリストに仕えた。	470
ウィルヘルモ大司教	12世紀	フランス	会食の時、肉を客に出すが決して自分は口にしなかった。		72
イヴォ (弁護士 の保護者)	1253	フランス ブルターニュ	たびたび断食し断酒し、食事は水とパンだけですませることも多かった。ある時は、貧者に給仕しかれの食べ残しだけを食べた。 あるとき1切れのパンしかないのに貧しい人に与えよと命じた。自分は食べなかった。	貧者の心身の救いのために尽くした。	454
・ノトブルガお手伝い	1265	オーストリア ラッテンブルグ	食べ物の残りを貧しい人に与えた。 説教の前には必ず断食をした。	幼い時、お腹をすかした経験があるので貧者の苦しみがわかった。	565
ルケシオ夫妻	13世紀 初め	イタリア カジアニ	ぶどう酒を貧者に与え自分は貧乏人のようにパンと水で煮たホウレン草しか食べなかった。	貧者に食べ物を与えたので食事をしようとする台所は空だった。	350～ 353
ジタおとめ	1280	イタリア ボザネロ	ある年飢饉があり多数の人々が豪邸に食べ物をもらいに歩いた。豪邸で働いていたおとめが穀物倉から食べものをだして与えてやった。	貧しいものを慰めた。	392
アンドレ (コルシニ) 司教	1302	イタリア フィレンツェ	断食をした。	苦業を続けた。	230
ユリアナ修道女	1341	イタリア フィレンツェ	長年の断食。	人のために捧げつくした。	552
フランシスコ (バオラ) 隠世修行者	1416	イタリア	しばしば断食。食べ物には山菜に限られていた。	自分の肉体をけっして甘やかさず鍛え上げた。	322～ 323
ペロニカ修道女	1445	イタリア ミラノ	粗食	神のみ栄のため。	82
・イグナチオ (ロヨラ) 司祭	1491	スペイン バスク	食べ物は人からもらわずかなものと、時には洞窟のそばにある野生のイチジクで飢えを満たし流れる泉でかわきをいやした。	あらゆる誘惑と試練とに打ち勝った。	90

・ベトロ（アル カンタラ）司 祭	1499	スペイン アルカンタ ラ市	わずかなパンとスープと野菜 だけで3日に1食。牛肉、 卵、ぶどう酒などはいっさい 口にできなかった。	「わたしのあとに従おうと思 うなら自分を捨て、自分の十 字架を担ってわたしに従え」 （マタイ16・24）各人の体力 に応じた節欲はキリストに従 って完徳の道を歩み真の幸福 に至るための手段として是非 必要だからである。キリスト 精神を文字どおり生涯に体现 した。これは16世紀の華や かな文芸復興における肉体礼 賛、あくなき物欲、上長への 反抗心に対する大きな教訓と なった。	375～ 376
ピオ5世教皇	1504	イタリア ボスコ村	断食をおこなった。 簡素な食生活を捨てなかつ た。	貧者に施しをした。	368
・フランシスコ （ザビエル） 司教	1506	スペイン	平戸から京都へ向かう旅を続 け、その途中の持ち物は炒米 を入れた小さな袋をもってい った。		523
・テレジア（ア ビラ）おとめ 教会博士	1515	パンプロナ 市 スペイン アビラ市	断食	『主よ、死かそれとも苦しみ のいずれかを。それ以外は何 もありません』自伝40・20	349
フィリポ（ネリ） 司祭	1515	イタリア フィレンツ ェ	食事はしばしばパンと水、ご くわずかなオリーブだけで簡 単にすました。	節欲の人であった。	479
ベネディクト修 道者	1526	イタリア ウアレンス ウエストフ ァーレン州	貧しい食事で満足した。 断食をした。	苦行に専念した。 つぐなうために。	326
・カロロ（ボロ メオ）	1538	イタリア ミラノ	1片のパンと一口のぶどう酒 が栄養の全てであり、しかも そのわずかのものすらあきら めねばならなかった。 食事は少量でしかもきわめて 質素なものであった。	自分の全財産を町の病院に寄 付する一遺言書 修道者は、常に貧しく生活 し、完徳に励み、こころを高 尚に保ちながら諸徳を実践し 神の栄光を大衆の上に表すよ うに努めなさいと遺言した。	423～ 431
トゥリビオ（モ ングロベホ）司 教	1538	スペイン	徒歩巡回するときにも断食し た。	自分の楽しみはなにも求めな かった。	302～ 303
ヨセフ	1556	イタリア レオネッサ	断食をした。	快樂よりも高い理想を掲げて いた。	220
・ヨハンナ・フ ランシスカ （シャルタン） 修道女	1572	フランス デイジョン	日中貧者がもの乞いにくれば 麦粉などを施すように命じて いた。 施しものを携えて貧者を訪問 したりした。	聖なる喜びにあふれ隠れた善 行を実行した。	547～ 548
フランシスコ （レジス）司祭	1597	フランス フォンケー ヴェルト	粗食に甘んじた。	自分に対しては極めて厳格。	550

・ペロニカ (ジュリアニ)	1660	イタリア メルカテロ	衣食住を質素にした。	キリストの受難を黙想してキリストとともに「苦しみのさかずき」を飲んだ。	31 83
・マルグリット (デュール) 修道女	1701	カナダ ケベック バレンヌ	貧しい人たちに食べ物を持って行ってやり自分で食べられない病人には自ら食べさせてやった。 1日2回の食事をトゥモロコシと水ですませ貧しい人と病人にパンを与えるようにシスターに頼んだ。	貧しい人のなかで奉仕活動をした。	577～ 583
・ジェラルド (マイエラ) 修道者	1726	イタリア バジリカタ 地方 ムロ町	食事の時にはごちそうに手をつけなかったり、ごくわずかな水しか飲まなかった。 食べ物は少ししか取らず、それも普通は野菜と固いパンだった。コックが気をきかせておいしいものを勝手に一皿つけ足すと、いつもとっておいて貧しい人にくれてしまった。 四旬節になると水にひたしたパンだけを食べておいしい物がでるとそれに苦い草を入れて食べていた。 食欲があっても少ししか食べなかった。 1754～1755の冬は寒く食糧不足になり、困窮者が群がった。かれは食料を修道院中から集め惜しみなく貧者に与えた。	節食が肉欲に対する有力な武器であることを自覚し、死のまぎわまで厳しく味覚を抑え口癖のように「お腹いっぱいでは神の愛は入らない」とっていた。	395～ 399
セラフィム (ロシア) 修道院長	1759	ロシア クルスク	小さな庭に野菜や草を育てて食とした。	精神と肉体の誘惑にたいしては厳しく戦った。	68
・フィリピン (シュエス) 修道女	1769	フランス グルノーブル市	毎日の食べ物はおもに畑や牧場の労働によって得たのでときにはパンさえもなくなることがあった。バターやチーズはなく、悪臭のある熊の油だけだった。冬はミシシッピー川が凍結して飲料水も不自由になった。牛乳はナイフで割らねばならないほどであった。食べ物は学院の生徒の残したパンくずをブリキの椀に集めてそれに水っぽいコーヒをかけて食べた。	成功も感謝も期待せず働く。苦行。	494～ 498
福者ナアナ (タイギ)	1769	イタリア シエナ市	上流社会と交流していたにも関わらずアナの家庭は飢えに苦しんだ。病床の時も食事は1切れの小さな魚とパン、果物1個。	貧しい人や病人を世話し自分は日常の苦しみを捧げた。	529

・ヨハネ・マリア・ピアンネ司祭	1786	南フランスリヨン市	月曜日には週1回の食事、おもにジャガイモを全部自分で料理し、毎日それに、わずかのパンをそえるだけであった。いつも同じ木のスープ皿や湯のみを愛用していた。スカンボ(草)を食べようとして試していた。いつも同じ木のスープ皿や湯のみを愛用していた。	回心のお恵みを願うため。	107
エウフラジア(ペルチエ)修道女	1796	フランスヴァンデー	家具もなく時として食べ物もなくわずかばかりあっても味のないまずいものであった。	畑には食べ物がなかった。	379
・アントニオ・マリア(クラレ)司教	1808	スペインカタロニア	巡回説教で歩き廻るときにも、1片のパンと身の廻りの品の他はいっさい受け取らず身につけなかった。	博愛 隣人愛「人を喜ばせる機会があったら決してそれをふいにしないように」	382
ヨハネ(ノイマン神父)	1811	ボヘミア	食事を控える。	自分を鍛えるため。	42
コンラド(バルサム)修業者	1818	南ドイツババリア州	自分のたべものまで節約して施しをした。	貧しい人には慈父のようであった。	370
福者マリー・テレーズ(スピラン)	1834	南フランスカステルノダリ	水とパンだけの朝食をした。	貧しくなったキリストともに貧しくなる(聖イグナチオの霊操-理想)。	526
ラファエラ(マリア・ボラス)	1850	スペインゴルドバ市	食器不足のために食事は交代でした。	清貧のため。	50
・コンタルド・フェリニ教授	1859	イタリアバランツァ	家から送られたナツメの実1箱を隣室の学生に「君ナツメは好きかい?好きだったらあげるよ」といって配った		388~394
バレンチノ司教殉教者	~269頃	イタリア	3日間の断食をした。	祈りがかなえられたお礼として神への感謝の意味。	210
・ルボ	5世紀	ツール市	週に2,3度は断食をした。	無視無欲 行為と生活でその手本を示した。	83
ロムアルド修道院長	950頃~1027	イタリアラヴェンナ	好きな食べ物は何1つとらずこれを貧者、病人に与えた。	罪の償いのため。	92

・印は下巻

あった(表2)。順を追って見ていくことにする。

1) 断食

食行動のうち最も多いのが断食で、その期間や動機は聖人で違う。

断食の期間はまちまちで、キリストにならい毎年40日間行った聖人（シリアのシサン300年）、長年（ユリアナ1341年）、しばしば行った聖人（ヨハネ1160年、トゥリビオ1538年、イヴォ1253年、フランシスコ1416年）、3日間行った聖人（スタニラオ1079年、バレンチノ〜269年頃没）、ときどき行った（ウダルリコ993年）、7年間に3

回（マインラード805年、ルトガルデイス1182年）、1年中行った聖人（ブルーノ1032年）あるいは自発的に厳しい断食をした聖人（フーゴ1052年）などが記述されている。期間の記述がない聖人として（アントニオ251年、シメオン390年、ピオ5世1504年、テレジア1515年、ベネディクト1526年、ヨセフ1556年、アンドレ1302年）などがある。熱心にした聖人（スイトベルト713年）、説教の前に必ず断食した聖人（ノトブルガ1265年）などである。

断食の理由はさまざまであった。①修業のため、②祈りと苦行のため、③司教の場合には教会の掟を守らない多くの信者の罪を償うため、④難苦欠乏に慣れておくため、⑤救済事業のため、⑥貧者の救済・人のために捧げたり尽くすため、⑦幼いときにお腹をすかした経験があるので貧者の苦しみがわかるためなどである。

2) 節食

節食というのは食欲にまかせて食べ物を腹一杯食べずに節制し、少量で食事に終止符をうつことと考えられる。①よく節食した（スタニスラオ1079年、ノルベルト1091年）②食事を控えた（ヨハネ1811年）、③食べ物を節約した（コンラド1818年）④水とパンだけの朝食（マリー・テレーズ1834年）⑤食欲があっても少ししか食べない（ジェラルド1726年）、⑥節欲の人（フィリポ1515年）などである。

表2 特徴的な食行動

断食	22
粗食・質素	20
貧者に食べ物を与える	17
節食	14
飢えた	1
食器	3
給仕をした	1
水がない	1

この理由をジェラルドは、節食が肉欲を制御するための有力な武器であることを自覚し、死に際まで厳しく味覚を抑え、口癖のように「お腹いっぱいでは神の愛は入らない」といつていたという。さらに、かれは肉欲を制御するために、御馳走に手をつけず、食べ物は少ししか取らない。またおいしいものがでると、それにわざわざ苦い草を入れて食べたりしたという²⁾。おいしいものはつたくさん食べたくなりがちなので、それを防ぐためであろうと推察される。

アッシジのフランシスコは、ちゃんと調理した食べ物を食べることは稀であったという⁴⁾。たまたまちゃんとした料理を食べることがあっても、灰をまぶしたり、水を加えて料理の味をなくしてしまおうとしたという。なにしろのどが渴いてなにか飲みたいという強い欲望がおこったときでも、水すら十分に飲もうとはしなかったという。食欲に迫られてどうにもならないとき、なにか食べたいと強い欲望に押しやられたとき、はじめて食事をとる気になったという。食事を楽しむことをいましめ、飽食が自分の快楽を満足させるのを厳しく避け、快楽より、高い理想を掲げていた⁵⁾。

3) 粗食・質素

ついで多いのは粗食・質素である。1) と 2) では食べ物の量的な側面を述べたが、ここでは食べ物の内容をさす。①貧しい食べ物を食べた（パウロ 347 年）②洞窟のそばに立っている 1 本のイチジクの実だけを食べた（パウロ 230 年）。③草や野菜を食べ 1 度もパンなどは食べなかった（テオドシオ 422 年、セラフィム 1759 年）④食べ物は雑草や果実であった（レオナルド 559 年）、食べ物はおもに草の根と木の皮と水であった（エジディオ 640 年）。⑤糠で作ったパンを食べた。病気のときでも肉には手をつけず魚も買わない。物乞いでえた卵とチーズは日曜日と木曜日に食べ、火曜日と土曜日には豆類と雑草を食べ、水曜日と金曜日には水とパンだけである（ブルーノ 1032 年）。⑥肉を食べないようにした（ギョーム 11 世紀、ウイルヘルモ 12 世紀）、⑦パンと水で煮たほうれん草しか食べなかった（ルケシオ夫妻 13 世

紀), ⑧山菜に限られていた(フランシスコ 1416 年) ⑨粗食(ペロニカ 1445 年), ⑩食べ物が無い, わずかばかりあっても味の無いまずいもの(エウフラジア 1796 年), ⑪じゃがいもとパン, スカンポ(草)(ヨハネ・マリア・ビアンネ 1786 年) ⑫質素にした(カロロ 1538 年, ペロニカ 1660 年) ⑬残り物のパンくずと水っぽいコーヒ(フィリピンのシュヌ修道女 1769 年), パンとスープと野菜で 3 日に 1 回位牛肉, 卵を食べ, ぶどう酒はいっさい口にしなかった(ペトロ 1499 年), ⑭簡素(ピオ 5 世 1504 年) ⑮パンと水, わずかなオリーブだけで簡単にすませた(フィリポ 1515 年) などである。

上述の節制と同じようにさまざまな理由があげられている。苦行に専念するためであり, 罪の償いのためであり, あらゆる誘惑に打ち勝つためであり, 自分に厳格を保ちこころを高尚に保つためである。さらに貧者に施すためにも自分の食べ物を贅沢にするわけにはいかなかった。食べ物が十分になかったという食糧事情もあったのであろう。なぜなら畑には食べ物がなかった(エウフラジア 1796 年)という。神のみ栄えのためである(ペロニカ 1445 年)。

4) 飢え

飢えには, 個人的な場合とそれが民族・社会全体に広がる場合とがある。個人的な場合では, イグナチオ(1491 年)にみられるように食べ物は野生のいちじくで飢えを満たし, 流れる泉で渴きをいやした。またアンナの家では, 夫と子どもがいたが夫の働きが悪いために家計は貧しく, 飢えに苦しんだ。そのために食事は小さな魚とパン, 果物 1 個であった(アンナ 1769 年)。地域社会全体に飢饉がおよんだ場合としては, ある年のこと, ミラー地方は飢饉に襲われた。ところがそのとき, 嵐に遭ってエジプトのアレキサンドリア港から麦を満載した船が数そうミラー港に避難してきた。司教(ニコラオ 270 年)はその積み荷の麦を貧しい人たちに分けてもらい, そのおかげで 2 年間食料に困ることもなく, 畑に植える種もできた。またある年に飢饉があり, 多数の人々が豪邸に食べ物をもらうために歩いた。豪邸で働いて

いたおとめが穀物倉から食べ物を出して与えてやり、貧しい人を慰めた（ジタおとめ 1280 年）。1754～1755 の冬は食糧不足となり困窮者が群がった（ジェラルド 1726 年）などである。

5) 貧者に与える

貧者に自分の食べ物を分け与える聖人が多かった。その与え方は各聖人のおかれた状況でそれぞれ違いがみられる。毎日自分が食事をする前に必ず 3、4 名の不幸な人に食べ物を与えていた（アンスガリオ 347 年）。毎日食事の時間になると貧者や孤児を宮殿に招待し食べ物を与えていた（マルガリタ 1045 年）。困った人をみるとすぐ助けてやり泣く人がいると慰めて励まし、近所の貧しい 3 人娘の家（身売り直前の）を助けたのは現在サンタクロースの名で知られるニコラオ（270 年）である。トマス（1118 年）の両親は子どもが毎年成長して大きくなると子どもの体重を測ってはそれと同量のパンを貧しい人に贈った。食べ物の残りを貧しい人に与えた（ノトブルガ 1265 年）。貧者に食べ物を与えてやったので、食事をしようとする台所はいつも空っぽだった（ルケシオ夫妻 13 世紀始め）。貧しい人に食べ物を与えた（パウラ 347 年、ピオ 5 世 1504 年）。施しものを携えて貧者を訪問した（ヨハンナフランシスカ 1572）。1 日 2 回の食事をトウモロコシと水ですませ貧しい人や病人にパンを与えるようにシスターに頼んだ（マルグリット 1701 年）。食料を修道院中から集め貧者に与えた（ジェラルド 1726 年）。自分の食べ物まで節約して施しをした（コンラド 1818 年）。学生で入寮時代に家から贈られてきたナツメの実を隣室の学生に配った（コンタルド・フェリニ 1859 年）。好きな食べ物はなに一つとらず貧者、病人に与えた（ロムアルド 修道院長 950 ないしは 952 年頃）。1 切れのパンしかないのに貧しい人に与えよと命令した（イヴォ 1253 年）。これらの例が語るように多くは自分の食べ物をけずって貧者に与えた。こうまでした行為の背後には、①罪の償いのため②隠れた善行③奉仕活動④献身的な人類愛などである。

6) 貧者に給仕する

聖者の中にはただ食べ物を与えるだけでなく給仕したり、口元まで与えてやる聖人もいた。貧者を集めてかれらのために食卓で給仕したり（エリジオ 590 年）、貧者に給仕し、かれらの残り物だけを食べたり（イヴォ 1253 年）、貧者を集めてかれらのために給仕した（エリジオ 590 年）。

7) 水

水は自然の泉などを利用したり（パウロ 230 年）、流れる泉で渴きを癒やしたりした（イグナチオ 1491 年）。飲み物として水は大切であったことは、パンと水ですませた（フィリポ 1515 年）、トウモロコシと水ですませた（マルグリット 1701 年）などの記述でわかる。

8) 聖人の食生活の背景

聖人の食生活を支える食糧はどの程度であったか。食糧不足・飢饉が推測される。その内容は図 1 に示すように多くの要因がある。聖人の生きた時代はさまざまな自然的原因、また人為的原因により食糧の供給が不十分であったと推察される。

その 1 つにペストなどの疫病があげられる。「ペストは 6～7 世紀コンスタンティノーブルで幾度も発生し人々を悩まし続けた悪疫である。そして 1337 年再びコンスタンティノーブルで発生したペストは翌 1348 年にはアルプスを越え、またたく間にヨーロッパ全土に拡大し、人々を恐怖のどん底に陥い

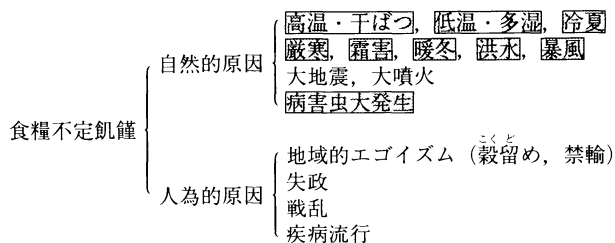


図 1 食糧不足・飢饉を発生させる原因（内嶋善兵衛，1990）

れた⁶⁾。エジプトでも 1403 年以來ペストが流行し、農村は荒廃し、飢餓が蔓延した⁷⁾ペストの流行には気候の寒冷化が深く関わり食糧の不足が生じた⁸⁾。

聖人のなかには、さまざまな食べ物に関連する苦難から人びとを守る「守護者」がいる。カタルド（マンスター、7～8 世紀）は「干ばつ（麻痺、盲目、てんかん）」の聖者といわれている。なぜならロッコナーマの村（イタリア南部）は 15 世紀からペストやその他の伝染病の被害がでていないという理由から「ペストを防ぐ聖者」ということになった。また 1483 年、かれはコラートという村も疫病から救っている⁹⁾。

9) 飢餓

食糧不足、飢饉を招く要因は異常気象、つまり自然的原因の占める割合が大きく不作や凶作をひきおこす¹⁰⁾。火山の大噴火によっても異常低温が発生しカスケード的に関連する。異常気象（WMO の定義）とは、①短期間のうちに社会や人命に著しい被害をもたらす危険な気象現象（大雨、大風など）②天候が 1 ケ月以上にわたって平均値から著しく片寄った場合（冷夏、干ばつなど）③何ケ月も続いて被害が生じる場合などである。

375 年フンの西進に圧迫されたゴート族がドナウ南岸のローマ領に入りますが、食糧不足などで暴徒化した⁷⁾。このように食糧がないために人々があるところへ向けて民族移動をした。ヨーロッパでは、14 世紀以降荒天が続き冬の気温が低下した。また 17 世紀は第 1 小氷河期と呼ばれる気候寒冷化の極期だった¹¹⁾。異常気象による麦類の凶作、アイルランドのじゃがいも飢饉（1841 年）などは有名である¹⁰⁾。ヨーロッパでおこった飢饉の一覧をあげておく（表 3）¹²⁾。

天変地異が食糧不足をもたらしたためにそれを守る聖人がいた。ワルブルガ（ドイツ、710 年）は「飢饉」から守ってくれる聖者といわれる。したがってシンボルとして 3 本のとうもろこし、王冠、しゃく、油の入った瓶を携えている⁹⁾。グレゴリウス（小アジアのポントゥス、213 年）は「地震の聖人」といわれる⁹⁾。ヤヌアリーウス（イタリア、205 年没）はベスビオ

表3 ヨーロッパの大規模飢饉

地 域	時 期	過剰死亡 (×千人)	地 域	時 期
ウクライナ	1946-46	2,000	イングランド・	1314
ギリシャ	1941-43	400	アイルランド	
ボルガ下流域	1932-34	5,000	イングランド・	1302
ウクライナ	1921-22	3,000 または 9,000 (資料2種あり)	アイルランド・スコットランド	
			イングランド	1294
東ウラル地区	1911-12	8,000	イングランド	1257-59
ウクライナ	1905-06		イングランド	1235
ロシア西部平原	1897-98		ロシア	1230-31
ボルガ峡谷	1891-93		アイルランド	1227
アイルランド	1845-50	1,500	ロシア (ノホゴロド) 地区	1215
ロシア	1833-34		イングランド・フランス	1193-96
アイルランド	1822			
ポーランド	1770		イングランド・	1183
ボヘミア	1770		ウェールズ	
スコットランド	1766		イングランド	1124
イングランド	1740-41		アイルランド	1116
フランス	1661		イングランド	1093
アイルランド	1650-51		ロシア	1070-71
モスクワ	1601-03	500	(ロスターボリン地区)	
イングランド	1594-95		イングランド	1069
アイルランド	1588-89		イングランド	1042-48
イングランド・	1586		ロシア	1024
アイルランド			(スダール地区)	
ハンガリー	1586		イングランド	1004-05
イングランド	1549		イングランド	976
イングランド	1527		ボロベレグ	971
イングランド	1521		イングランド・ウェールズ・	954-58
ハンガリー	1505		スコットランド	
アイルランド	1497		スコットランド	936-39
アイルランド	1447		イングランド	310
イングランド	1437-39		スコットランド	306
アイルランド	1410		スコットランド	228
イングランド	1392-93		アイルランド	192
イングランド	1353		ローマ	185
ヨーロッパ	1346-50	40,000 (大部分は栄 養失調による)	イタリア半島	79-88
			イングランド	54
			ローマ	23
イングランド・	1341-42	(これ以前は過剰死 亡記録なし)	ローマ	AD 6
スコットランド			ローマ	385 BC
			ローマ	436 BC
イングランド	1321			

出典：Foster & Leathers, *The world food problems*, 1998 より

丸井英二編 食の文化フォーラム 17 p. 230 ドメス出版

火山の噴火からナポリの町を守ったので「噴火の聖人」と言われる¹⁶⁾。トゥルマルティヌス（パノニア・ハンガリー、316年）は「貧困を守護する聖者」と言われる⁹⁾。

ま と め

聖人たちは、欲望にまかせて食事をせず、断食、粗食・質素、節食を心がけた。その理由は、①信仰の成就、神への忠誠、こころの鍛錬、身体を鍛えるためなど自分自身のためであると同時に②他者への愛と犠牲の気持ち③自分と共同体の罪の許しを乞うためなどであった。食事という行為のなかに「神聖」が秘められ、他者へのおもいやり、「博愛」「共存」「共同体の平安」など「精神性」を重要視している。おいしいものを腹一杯食べないことに意を注いでいた。食事は精神と肉体を鍛え、厳しい修養をするための機会であり、食べることが目的ではなかった。

聖人の食行動は、健康や見てくれ（スタイルのうえでの美）のためではなく、快楽のためでもない。食欲や欲望のとりこになちがちな自己を引きはなすことが絶え間なく実践されていた。

ここに述べた聖人は302人のうち66人で約5分の1にすぎない。残りの聖人の食生活には触れられていない。聖人伝を読むと聖人という栄誉にたどり着くまでに、さまざまな困難と誘惑に出会いながら、失敗を重ねている。推察の域をでないが、聖書の基本原理である食行動を貫くことは難しいことかもしれない。

文 献

- 1) 池田敏雄：教会の聖人たち 上巻 中央出版 1992
- 2) 池田敏雄：教会の聖人たち 下巻 中央出版 1992
- 3) D. H. ファーマー：オックスフォード聖書事典 1992
- 4) 田辺 保訳：聖フランシスコの小さな花 p. 288 教文館 1947

BUGHETTI, Benenuto : *I Fioretti di San Francesco con prefazione e note*, Firenze,

1926

BASTIANI, Giovanni M., *ibid.*, Assisi, 1963.

BONINO, Guido Davico, *ibid.*, Torino, 1974.

ENGLEBERT, Omer : *Les Fioretti de Saint François*, Paris, 1994

ENGLEBERT, Omer : *Les Fioretti de Saint François*, Paris, 1944

を訳出したもの

- 5) J. ヨルゲンセン著, 佐藤要一訳: アシジの聖フランシスコ ドン・ボスコ社 1992
- 6) 安田喜憲: ペスト大流行 (速水融, 町田洋編: 文明と環境所収) 第7巻 p. 121 朝倉書店 1995
- 7) 歴史学研究会編: 世界史年表 p. 136~137 1995
- 8) 安田喜憲: 現代文明崩壊のシナリオ (速水融, 町田洋編: 文明と環境所収) 第6巻 pp. 247 朝倉書店 1995
- 9) ELIZABETH Hallam 著, 鏡リウウジ・宇佐見和通訳 聖者の事典 柏書房 1996
- 10) 内嶋善兵衛: 異常気象と文明 (速水融, 町田洋編: 文明と環境所収) 第6巻 pp. 42~65 朝倉書店 1995
- 11) 安田喜憲: 歴史と気候 (速水融, 町田洋編: 文明と環境所収) 第7巻 p. 121 朝倉書店 1995
- 12) 丸井英二編: 飢餓を考える p. 221 飢餓-食の文化フォーラム 17 に所収 ドメス出版 1998
- 13) 山本 茂: 栄養学的にみた飢餓と飽食 p. 156-丸井英二, 飢餓-食の文化フォーラム 17 に所収 ドメス出版 1998
- 14) キリスト教人名辞典, 日本キリスト教出版局 1986